

竹本碩太夫／咲くやこの花インタビューvol.51

竹本碩太夫(たけもと・ひろたゆう)【令和7年度 演劇・舞踊部門[文楽・太夫]】



若き太夫の飛躍！ 中学生で義太夫節の魅力にはまり、文楽の世界へ

文楽の若手太夫として着実に経験を重ね、注目を集めている竹本碩太夫さん。札幌市のこどもの劇場やまびこ座で人形浄瑠璃に親しみ、次第に義太夫節に惹かれて文楽の道を志すように。19歳で文楽研修生となり、芸歴10年目での「咲くやこの花賞」の受賞に、ご本人も驚きを隠せない様子でしたが、師匠の竹本千歳太夫さんの教えを真摯に受け止め、基本に忠実に芸を磨いてきた歩みが、今回の受賞につながったことを感じさせます。上方伝統芸能文化ユニット「霜乃会」での活動を通して他分野の表現者とも交流を重ね、視野を広げてきたことも、その芸の確かさや奥行きにつながっています。これからの文楽の担い手として、今後の活躍がますます楽しみなお一人です。

取材・文／岩本和子

いつかは…と意識していた「咲くやこの花賞」

「咲くやこの花賞」受賞、おめでとうございます。受賞のご感想を教えてください。

率直に嬉しかったです。若手の時分に頂ける賞はいくつかあると思いますが、咲くやこの花賞は、鶴澤

寛太郎さんが受賞されたときに地下鉄駅に掲示されているのポスターを見たことは記憶に新しいです。私が所属している「霜乃会」のメンバーでも、旭堂南龍さんや京山幸太さんが受賞されているので、いつかは頂きたいと意識していました。

「いつかは」と思っていたら、このタイミングは碩太夫さんにとって早かったでしょうか？

そうですね。当時、寛太郎さんの受賞者インタビューを読んだのですが、当時、寛太郎さんも早いという意味で「びっくりした」と仰っていました。僕は19歳で文楽研修生になって、芸歴は今年で10年目になりますが、もう本当に早いですよね。驚きました。



碩太夫さんの子どもの頃からの話を聞きたいなと思っていて、どのような経緯で文楽の世界に入ったのでしょうか？

札幌市のこどもの劇場やまびこ座が主催するワークショップに小学生の頃から参加していました。当初は人形浄瑠璃に限らず、様々な体験をしていましたが、小学校5、6年生ぐらいの時から本格的に人形浄瑠璃のサークル活動に参加しました。高校を卒業した年は研修生の募集がなく、札幌で1年間人形浄瑠璃の活動も続けながらバイトもして、19歳で大阪に出てきました。

サークル活動で人形浄瑠璃されていた時は人形を遣っていたのでしょうか？

人形を遣っていましたが、当然、義太夫節が聞こえてきます。それで、だんだん義太夫節に興味を持つ

ようになりました。床の前で陣取り義太夫節を聞いている中学生がいるぞと噂になっていたようで(笑)、高校時分に、いわゆる義太夫節コースが開設されました。そこからは太夫(語り)もやりますし、三味線も触り、人形も遣っていました。

オールラウンダーですね。19歳で文楽研修生に応募された時は、太夫になろうと決めていたのでしょうか？

はい、最初から太夫になりたいと思っていました。

太夫のどこに惹かれたのでしょうか？

義太夫節が好きな理由は漠然としているのですが…。義太夫節が僕にとって心地いい音楽でした。僕は友達とカラオケへ行っても歌う曲がなく(笑)初めて買ったCDも義太夫節のCDでした。音楽の授業の合唱は結構好きだったので、声を出すのは好きな方だと思います。



舞台から感じ取る師匠の姿勢

研修生になり、プロの指導を受けて、大きな違いはありましたか？

太夫の事ではないのですが、まず最初に驚いたのは三味線の音の大きさです。札幌にいる時分に聞いていた音とは全く違い、『アンプを繋いでいるのか』と思うぐらい大きな音で衝撃的でした。太夫の事でしたら、例えば意識が飛びそうになるくらい一生懸命、声を出しても、客席ではちょうどよく普通に

聞こえるんですよね。例え冷静に語っているように見えたとしても、実際に落ち着いて声を出しているようでは舞台の芸としてそぐわないんだなと実感しました。あとは、とても厳しい世界だと思っていたので、挨拶を返してたださるだけで感動しました(笑)『もっと厳しい世界だと思った』と言うと語弊がありますが、学校のように手取り足取り教えてくださり幸せでした。

師匠は竹本千歳太夫さんです。なぜ千歳太夫さん入門しよう？

2年間の研修の中で年度末に発表会があるのですが、1年目の研修発表会では『菅原伝授手習鑑 寺入りの段』を務めました。その稽古をつけてくださったのが師匠でした。札幌で少し義太夫節を経験していたものですから、生意気にも、『もっと格好よくできるのではないかな』などと思っていました(笑)でも、文楽の世界に来たからには文楽に染まろうと、師匠に教えていただいた通りにやろうと努めました。研修発表会が終わり、竹本住太夫師匠のもとへ伺いますと「この子は素直でいい」と言ってくださったんです。ドキュメンタリー番組のイメージで絶対に怒られると思ったいましたから…(笑)その時に、師匠(千歳太夫)が僕にとって正しい導きをしてくださったんだと感じて、弟子入りをお願いすることになりました。



弟子入りされた年の7月に初舞台を踏まれました。その時に師匠から何かお声を掛けてもらったとか、印象に残っているエピソードはありますか？

何か金言的なことを言われたというよりは、師匠は舞台上で示して下さっていると感じます。義太夫節にはルールがあり、そのルールを着実にこなす姿勢を、舞台を通して伝えてくださっているように感じます。

師匠の舞台は、どのあたりからご覧になっているんですか。

碩太夫 師匠は「切語り(きりがたり)」という格で、相撲でいうと横綱です。「切語り」には必ず「白湯汲み」というものが付きます。師匠が語られている床の端に半畳畳を敷いて、そこに僕が座っています。お客さまから丸見えですが、そこで師匠のことをずっと見て義太夫節を聞いているという…。たまに外国人のお客さまや学生のお客さまが不思議そうな顔をして見ているときがありますね(笑)。

碩太夫さんのお名前はどなたが付けられたのでしょうか？

碩太夫 もちろん師匠です。僕の本名から「碩」という字を取り入れてくださいました。なかなか馴染みのない漢字ですから、未だに「硯」と間違えられます(笑)。

上方伝統芸能文化ユニット「霜乃会」でも活躍

冒頭で「霜乃会」のメンバーが受賞されたというお話をされましたが、「霜乃会」の活動は今、どんな位置づけですか？

1年のほとんどを文楽の世界にいますので、家にいる時間よりも劇場にいる時間が長い…。そうすると、閉鎖的な世界の中で生きていくことにはなりますが、同じ伝統芸能という傘の下であっても、違う分野の方との交流があるということは、色々な発見があります。本当に貴重な機会を頂いていると思っています。



どのようなきっかけで「霜乃会」のメンバーになったのでしょうか？

メンバーのお1人に、茶道裏千家業躰の松井宗豊さんがいらっしゃるのですが、宗豊さんは文楽研修所の茶道の講師で、当時は講師と研修生の関係でした。「霜乃会」のコンセプトが『若い人たちでユニットを組みましょう』ということでしたので、宗豊さんが「研修の時に接した彼に声をかけてみようかな」と思ってくださったようで、そこが入り口でした。

「霜乃会」のメンバーとお会いしていかがでしたか？

旭堂南龍さんや桂紋四郎さんは本当に面白い方で、文楽の世界にはいないような先輩です(笑)また、義太夫節は能から取り入れているものが沢山ありますので、能楽師の林本大さんに教を乞うなど、いろいろな交流をさせていただいています。

目指すは教科書のような「楷書の芸」

では、将来目指す太夫像はありますか。

師匠のようになることです。また、師匠の師匠、四世竹本越路太夫師匠のようになること。それは「楷書の芸」ということだと思います。やはり芸人ですから、個性を出したくなるんですよね(笑)でもそれをやると教科書からそれる可能性があると思っていて。僕は中学生の時、越路師匠の浄瑠璃を聞いて、面白くないと思ったんです。質実剛健といいますか、もっと特徴のある語りをする方が他にいらしたので。でもある時から、『楷書の語りをするのは難しいことなんだ』と思うようになったんですよ。大序のお稽古の時などに、僕は後輩に何を伝えられるのかなと、最近よく考えるのですが、やはり義太夫節のルールを伝えられるようになりたいなと思っています。そのためには、自身がもっともっと勉強しなければなりません。



教科書のような存在に。

そうですね。そこを目指したいです。基本に徹する。個性は自然と出てきてしまうものですからね。僕がやっている時点で、僕の個性ですから。もしそれを意図的に誇張してしまっているのであれば、それは少し違うのかなと思います。

話は変わりますが、お休みの日は何していらっしゃいますか？

最近休みがあまりないのですが…(笑)、公演がなく稽古だけの日が「休みの日」と言う感覚ですね。僕は中学生で文楽に興味を湧かすまで、ずっと地下鉄の運転手になりたかったんです。今でも鉄道が好きで、その延長なのか…旅行も好きです。巡業や地方公演に行った時は、『合間を縫ってどこ行こうか』と旅行の計画を立てるのが趣味になっています。



関西で一番推しの鉄道はありますか？

そうですね…今パッと思いついたのは京都の鉄道博物館です。今、京都に住んでいますが、修学旅行も京都でした。まさか大人になって京都に住むとは…。(笑)容易に鉄道博物館に行けるようになったのは嬉しかったですね。北海道で走っていた機関車が、今京都の鉄道博物館で展示されているという、僕と同じ境遇の機関車もいるんですよ(笑)。

では、最後に碩太夫さんが大阪市に「咲くやこの花賞」を贈るなら、大阪市の何に贈りますか？

僕は仕事柄、色んな空港に行きますけど、伊丹空港に着陸するときに見える夜景が一番きれいだなと思います。飛行機の窓から大阪城やあべのハルカスが見えたら、大阪に帰ってきたなあと思います。